

## 大阪語の文末詞「か」の音調と機能： 内省に基づく考察

郡 史 郎 (大阪外国語大学)

要旨： 大阪語の文末詞「か」について、音調による伝達機能の違いを筆者の内省に基づいて考察した。「か」は順接、低接、疑問上昇、強調上昇、高接下降の5種類の音調をとる。「か」の機能としては真か偽かの回答要求、相手の発言の真偽や意志の確認要求、自分の誘いに対する同意要求、自分の発言に対する反応要求、強い否定などがある。同じ語に接続しても音調によって「か」の伝達機能は変わるが、順接音調と低接音調とでは聞き手に対する「呼びかけ性」あるいは「働きかけ性」の強弱の差がある。一方、疑問上昇と強調上昇とでは、中立的な回答要求か反語的な回答要求かという差が生じる。論文では以上のような機能差を用例によって説明した。また、大阪市および大阪府出身者計23名に聞き取り調査を行なった結果、強い否定と回答要求をあらわす場合の「か」の音調には被験者間に差があることがわかったが、それ以外の場合については回答者の多くは「か」の音調の使い分け方が筆者と概ね一致していると思われた。

Tones and Communicative Functions of Sentence-final 'ka'  
in Osaka Japanese

KORI Shiro

*Osaka University of Foreign Studies*

*Abstract:* This paper describes how the communicative functions of the sentence-final particle 'ka' in Osaka Japanese are determined by its tone. The particle may assume a neutral, low, rising, extremely high or falling tone. Its major functions are questioning, request of confirmation, request of agreement, request of response, and negation. Both tonally neutral and low-pitched 'ka' are used when the speaker requires the confirmation or agreement of the hearer, though in the latter tone the requirement is weaker than the former. Extremely high-pitched 'ka' is used for a rhetorical question, while rising 'ka' is used for a neutral question. Falling 'ka' functions as a negation.

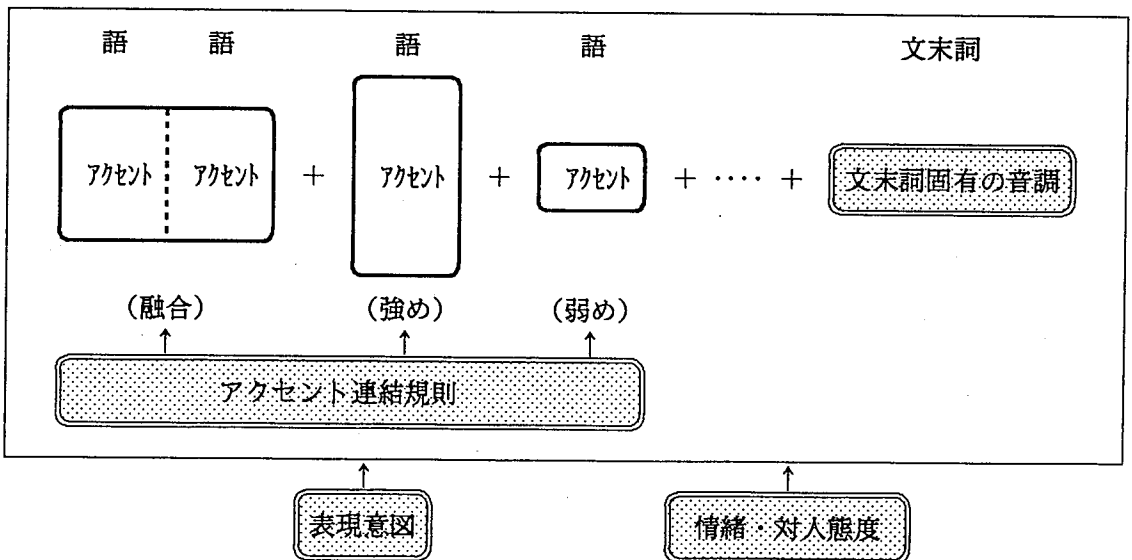
# 1. はじめに

## 日本語の発話の音調規定要因としての文末詞

発話の音調を規定する要因にはさまざまあるが、諸言語の音調に関するこれまでの知識を総合すると、それらは、語彙レベルの要因（アクセントや声調）、文法にかかわる要因、談話構造にかかわる要因、情緒・対人態度にかかわる要因、話体的要因、そして生理的要因、に大きく分けられる。これまでの音調研究をこうした包括的な観点からまとめた論として、たとえば英語についての Couper-Kuhlen (1986) がある。

しかし、日本語（有アクセント方言）について、日本語固有の事情に即してその音調規定要因を考える場合、筆者は具体的には次の5つのものを考えると都合がよいと考え、その簡単なモデル化を試みている（郡 1989）。その5つの音調規定要因とは（1）アクセント、（2）アクセント連結規則、（3）文末詞の音調、（4）表現意図（言いきり、疑問など）、そして（5）情緒・対人態度である（下図参照）。このうち、（2）のアクセント連結規則とは、文を構成する語をひとつひとつとりだして発音したときの音調をそのままつないでも自然な発話の音調にはならないという事実に関連するものである。文では個々の語のアクセントによる音調の上下動が他より強調されたり弱められたり、あるいは隣接する2語が音調的に融合して1語のようになっていたりする。アクセント連結規則はこのようなアクセントどうしの連結のしかたを定める規則を指す。これは文としての発音の自然さをつかさどり、個々の方言らしさをも支配する重要な要因であり、モデルの中核部分をなす。アクセント連結規則として重要なものに、文の情報構造に依存する規則（いわゆるプロミネンスに関わる部分）と、文の統語構造に依存する規則（準アクセントに関わる部分）がある。

日本語（有アクセント方言）の音調規定要因のモデル



従来国語研究の世界で「イントネーション」と称されてきたものは、主に上記(4)の表現意図(言い切り、疑問など)の音調への反映であり、時に(5)の情緒や対人態度に言及されることはあっても、上記(2)のアクセント連結規則や(3)の文末詞の音調が注目されることはほとんどなかった。アクセント連結規則については別の機会に詳述するつもりであるが、本稿では5つの音調規定要因のなかでもっとも日本語の特色が現れると思われる文末詞の音調について、大阪の「か」を素材としてケーススタディを試みる。

## 文末詞の機能と音調

諸方言では種々の文末詞がさまざまな機能や待遇で使われており、個々の方言を特色づける重要な働きをしている。しかし、その音調については従来あまり注目されてこなかった。文末詞は音調的に前語のアクセントと融合する場合(順接)もあるが、低くつく、あるいは高くつく、内部上昇する、あるいは内部下降するというように固有の音調をもっている場合がある。

さらに、ひとつの文末詞が複数の音調で発音され、それに対応して伝達機能が異なることがある。たとえば第2節で述べる筆者の内省による大阪語の例で言えば、「か」をそのままの高さで続けるか低くして続けるかで、「あかんか」なら  $\overline{\text{あかんか}}$  と  $\overline{\text{あかんか}}$  で「予想どおりダメだった」と「期待していたのにダメだった」というように、「帰るか」なら  $\overline{\text{帰るか}}$  と  $\overline{\text{帰るか}}$  で「自分は帰るつもりで、相手もそうすることを暗に求めている」と「相手が帰りたいたいと思っているかどうか探る」というようなニュアンスの違いが生じうるのである。

## 文末詞の音調はアクセントかイントネーションか

ところで、文末詞がこのように音調次第で伝達機能を変えするという現象は、音調と伝達機能に対応関係があるという点においては、「言い切り」と「疑問」を音調によって区別させる現象、すなわち従来「イントネーション」と呼ばれてきたものと同じである。しかし、いま見たような文末詞の音調と伝達機能の対応関係は、いわゆるイントネーションとは異なる点がある。なぜなら、言い切りと疑問の対立は文末の形態の如何にかかわらず音調のみで実現されうのに対し、この「か」における「予想どおり」と「期待はずれ」という対立は、別の文末詞、たとえば「で」や「わ」には生じない。

文末詞によって音調と伝達機能の対応関係が異なるということは、文末詞の音調が文末詞そのものに属する辞書的情報であることを意味すると考えるべきであろう。その意味では、文末詞音調はむしろアクセントと共通の性格を有している。

もちろん、音調によるこうした文末詞の伝達機能の差が、「橋」と「箸」のような語彙的な差でもなければ、大阪語の「寝てみる(寝みる)」(試しに～)と「寝て見る(寝見る)」(寝ころんで何かを見る)の「て」における音調の対立のような文法的な機能をもつ差でもなく、いわばニュアンスの差であることや、後に述べるように音調と伝達機能の結び付きが恣意的ではない部分があることを思わせる点(「か」の機能と音調の対応関係概観の項参照)で、アクセントとも相当異なる性格を有する。このように、大阪の「あかんか」に代表されるような文末詞音調は、「アクセント」「イントネーション」の両者の性格が混在したもので、もしくはどちらとも言いきれない存在である。

文の音調をアクセントとそれ以外のもの（すなわちイントネーション、プロミネンス）のいずれかに分類してよしとするのが従来の国語学の考え方である。この観点からすれば、このような文末詞音調もアクセントかイントネーションかということが当然問題になるわけであるが、逆に文末詞音調はこのような素朴な音調観に疑問を投げかけているわけである。本稿で詳述するように、文末詞の音調の機能には、表現意図にかかわる部分も情緒・対人態度にかかわる部分もある。むしろ、文末詞こそそうした他の音調規定要因を実現するための形式であるにもかかわらず、先述の日本語音調規定要因モデルではあえて文末詞を独立の音調規定要因としたのには、以上のような事情がある。

## コミュニケーション研究の立場からの文末詞の音調の重要性

文末詞の音調次第で「あかんか」に「予想どおり」と「期待はずれ」というような伝達機能の微妙な差があらわれることからわかるように、文末詞の音調は対面コミュニケーションの繊細な部分の成立に関与している。文末詞の音調の適切な使用は互いの心を通わせ、生き生きとした話し方をするために欠かせない。文末詞が生活言語の要であり個々の方言を特徴づける「顔」であるとするれば、文末詞の音調はその「表情」ということになるだろうか。文末詞の音調と機能の対応の実態を把握することによって、はじめて日本語よるコミュニケーションのしくみが明らかになるものと考ええる。

日本語における文末詞の機能の重要性は繰り返し指摘されてきたが、佐久間鼎氏や田中章夫氏、木部暢子氏の論考を除けば、その音調の役割について十分意識されてきたとは言いがたいように思える。方言の文末詞の研究に積極的に取り組んでいるのは藤原与一氏とその門下の諸氏であるが、藤原氏自身による大著「方言文末詞〈文末助詞〉の研究」をみても、文末詞そのものの音調に関する配慮は十分とは言えない点残念である。

## 本稿の目的と方法

本稿の第一の目的は、大阪語の文末詞「か」をとりあげ、はなしことばにおけるその音調と伝達機能の対応関係を、筆者の内省に基づいて記述を試みることである（2、3節）。なお、筆者は1954年生、15才まで大阪市城東区、それ以降主に府北東部茨木市に居住している。次いで、内省から帰納した音調と伝達機能の対応関係が他の大阪語話者にもあてはまるかどうかを、23名の大阪語話者を被験者とした聞き取りテストの結果に基づいて検討する（4節）。考察の対象として「か」をとりあげたのは、大阪語の主な文末詞「か」「な」「で」「て」「わ」等のうち、「か」が音調の点でも機能の点でももつとも豊富なバリエーションを有すると思われるからである。

## 「か」が接続する形

本稿では文末詞が接続する文法形式を指して「前形式」と呼ぶことにする。「か」の前形式は、それだけで自立しうる形式、すなわち自立語あるいは「名詞＋格助詞」の形、および形容動詞語幹である。ただし、動詞に「か」が接続するのは終止形（「帰る」「食べる」）か意志形（「帰ろ」「食べよ」：子音語幹＋/o/、母音語幹＋/yo/）であり、命令

形（「帰れ」「食べ」）や連用命令形（「帰り」「食べ」）には、それらを引用する形でしか接続しない（低接・機能1の項参照）。名詞＋「や」（指定）の場合も同様に引用形として接続する。引用であれば「な」「で」「て」「わ」等の他の文末詞にも接続しうる。形容動詞にはふつう語幹につくが、引用の場合は終止形にも接続可能である。また「か」と動詞・形容詞の語幹との間、あるいは名詞との間には種々の助動詞が介在しうる。

### 「か」の音調

本論では大阪の「か」の音調として順接、低接、疑問上昇、強調上昇、高接下降の5種類を想定する。順接、低接、高接は前形式からの接続形式を示す概念で、前2者は和田(1969)に準ずる。「高接」もその延長線上にあるが、それぞれの実相は以下のとおりである。

順接： 「か」自身は音調的に主体性を持たず、前形式と一体となってそのアクセントを実現する形で接続する。すなわち、前形式のアクセントが高起無核型なら前形式末と同じ高さでつき（寝る→寝るか）、低起式無核なら「か」だけが高くつく（見る→見るか）。また前形式が高起式・低起式ともに非尾高の有核型なら、前形式末の低拍に同じ高さで接続し（おる→おるか（居る））、低起式の尾高型なら高拍となる前形式末に低くつく（あめ；あめ→あめか（雨））。前形式のアクセントが有核の場合は、低接する「か」と区別できない。

低接： 前拍が高拍であれば低く、低拍であればそれを受けてそのまま接続する。すなわち、前形式のアクセントが高起式・低起式とも無核型なら低くつき（寝る→寝るか、見る→見るか）、前形式が高起式・低起式ともに非尾高の有核型なら、前形式末の低拍に同じ高さで接続し（おる→おるか：なお、このとき「か」が前形式末の低よりさらにいっそう積極的に下がって接続するという音響的証拠は筆者はまだ持っていない）。前形式が低起式の尾高有核型なら高拍となる前形式末に低くつく（あめ；あめ→あめか）。前形式のアクセントが有核型の場合、順接の「か」と区別できない。

高接： 前拍が低拍であれば高く、高拍であればそれを受けてそのまま接続する。すなわち、前形式のアクセントが高起無核型なら前形式末と同じ高さでつき（寝る→寝るか）、低起式無核型なら「か」だけが高くつく（見る→見るか）。しかし前形式が高起式・低起式ともに非尾高の有核型なら高く接続し（おる→おるか）、低起式の尾高有核型ならいったん下がった後で再び高くつく（あめ；あめ→あめか）。前形式のアクセントが無核型の場合、順接の「か」と区別できない。なお、筆者の内省に関する限り、高接した後で下降する「か」はあると考えるが、高接するだけの「か」を立てる必要はないと考えている。

### 「か」の機能と音調の対応関係の概観

概して、「か」は聞き手に対する話し手の要求を表わすということが言える。その要求する対象は、真か偽かの回答であったり、発言の真偽や相手の真意の確認であったり、話し手の誘いや発言に対する同意であったり、話し手の発言に対する何らかの反応であったり、あるいは話の内容に聞き手が注目すること（「やんか」「ねんか」「てんか」の形で）

であったりする。要求の対象が何であるかは前形式によっておよそ決まってくるが、音調の違いはそこに微妙な機能上のニュアンスの差を与える。

音調に関して一般的に言えることは、順接・低接のいずれも使える場合、順接の「か」のほうが低接の「か」より要求の度合いが強いということである。疑問上昇音調も使える場合は、要求の度合いがさらに強くなる。

このように高さのレベルと要求のレベルに対応関係が認められることは、「か」における音調と機能の結び付きが恣意的ではないことを思わせる。「か」の母音の長呼はこうしたニュアンスを強調することがあるが、母音の長短で機能が変わるわけではない。

要求ではない「か」の用法として、高接下降音調で強い否定・拒否の意味がある。これは挑戦的とも言ってよい態度を表わす。なお、第3節で見るが、命令を表わす「～せんかー」で「かー」に高接下降音調を使うといらだちを込めた強い働きかけになり、「～ねんかー」「～てんかー」「～やんかー」でも、同じ音調が自分の話している内容に注目することを聞き手に要求する（＝自分の話を聞いてほしい）という、聞き手への強い働きかけをあらわす。このことは「か」以外の文末詞にもあてはまりそうである。このように、高接下降音調には一般に、聞き手に強い働きかけをおこなうという機能がありそうである。これも音調と機能の恣意的でない関係と言えよう。

### 音調の対立の中和

前形式のアクセントによって「か」の音調の対立が中和する可能性があることは、先に「か」の接続形式に関して述べた。前形式が助動詞を含む場合も、助動詞自身の音調的要求のために「か」の音調の対立が中和することがある。そのような助動詞は「ねん」「やろ」「よる」「たい」「へん」；「です」「ます」等である。以上のうち「ねん」「やろ」「よる」「たい」「へん」は助動詞の直前で音調が下降するため「か」の順接と低接の対立が中和する。「帰った」「食べた」等の完了形の場合も動詞内部に音調の下がりめがあるので、同様の事態が生じる。一方、「です」「ます」では助動詞の後にくる形式は低接できないため、やはり「か」は順接と低接の対立が中和する。また助動詞によっては「か」と組合さって独特の表現機能を生じるものがある。こうした音調的あるいは・機能的に例外となる場合については第3節で扱う。

「(ら)れる」「(さ)せる」「はる」「ん」は音調的に無性格であるので、これらの助動詞を前形式が含む場合は、次の第2節の記述が適用できる。

### 用例の言語と表記

次節以下で音調別に「か」の機能を用例を示しながら見てゆくと、個々の用例はすべて作ったものなので、文法、語彙、アクセントのすべての点において筆者の個人語を反映している。なお、表記法として、長呼される「か」を便宜上「かー」と表記するが、これにあわせて用例でも引く音はすべて「ー」で表記してみた。ただしそれでは発音がわかりにくいのが長母音を含む動詞の語幹を漢字で書く場合である。具体的には、「言う」([ju:] )は、ひらがなで表記する場合のみ「ゆー」とし、漢字を使って表記する場合は共通語式表記の「言う」とする。また「買った」にあたる [ko:ta] は仮に「買おた」と表記した。

## 2. 「か」の音調と機能詳説

### [1] 順接音調

寝る→寝るか(-), 見る→見るか;見るか-, おる→おるか(-), あめ;あめ→あめか(-).  
「おる」や「雨」のように前形式のアクセントが有核型のとき低接音調と区別できない。

#### 機能1

前形式： 自立語一般，および名詞＋格助詞。動詞・形容詞（＋助動詞）は終止形に，形容動詞は語幹につく。

機能： 形式的な確認要求という行為を通して，話し手が得た情報や遭遇した事態を受容したことを示す。しかし，このとき話し手にはその情報や事態，あるいは相手への感情的な関わりが欠けている。そのため，無感動，なげやりな感じ，あるいは無関心感，あきらめた感じをしばしば起こさせる表現となる。「か」の母音の長短による機能の差はない。対象や相手への感情的関わりが薄い点，および確認要求の度合が比較的強い点等で低接音調・機能1の「か」と対立する。ただし，低接音調との差は微妙なものであり，現実の発話ではそれぞれの音調の機能差が十分反映していないこともある。

#### 用例と分析：

弟の和夫の友達が遊びにきました。和夫はすぐ帰ると言うて出かけていたのでその子はテレビゲームをして待っていましたが，なかなか和夫は帰ってきません。いつまでもこの子も待ってへんやろなと思ってたら，案の定その子は「もー帰るわ」と言いだしました。そこで兄が：「そーか。帰るか-（カ）。悪いな-，せっかく来てもーたのに。和夫帰ってきよったらおこつとくわ。」（ここでは相手が帰ることをすでに予測しており，またそれを止めようとはしていない。もし相手が帰ることが残念であるかのように言うには カ とする。「か」をつけなくても言えなくはなく，その場合ニュアンス的には カ に近いが，それではますます他人事のようになる。なお，ここでは発言の直接的引用でも条件帰結の発言ではないので低接（機能1）の「か」を直接続けた カ はそぐわない。）

山本君がその場にはいない川口さんのことをボロくそにけなしています。それを聞いていた中村君があきれて：「そんなきついこと言うか（カ）。川口さんかてえーとこあるで。」とたしなめます。（カ とすることで山本君のけなしをある程度しかたがないとあきらめているようである。山本君のけなしを認めず，驚きとがめる場合は カ とする。また，発言の直接的引用でも条件帰結の発言ではないので低接の「か」を直接続けた カ はそぐわない。）

2万円のビデオデッキを買って「えー買いもんをした」とはじめは喜んでたS君ですが，1週間もしないうちに動かなくなっていました。保証書もついてないし「やっぱり安もんはあかんか」（カ）とあきらめざるをえません。（この「か」を使うと，故障する可能性を最初から予測していたためにあきらめた感じ，あるいはなげやりな感じがする。逆に，故障を予測しておらず驚いた場合や失望した場合は，低接音調で カ と





## 機能2（順接）

**前形式：** 動詞の意志形（「帰ろ」「食べよ」）。意志形のアクセントは常に無核であるので、この機能の「か」が順接か高接かは本来判断できない。しかし、この他の機能において高接するだけの「か」は筆者の個人語では認められないので、この機能のためだけに高接の「か」をたてることはせず、これを順接とし、これと順接・機能1の場合の間との関係が、低接・機能1と低接・機能2の間との関係と平行になるようにしておく。

**機能：** 話し手の提案に対して相手が従うことの要求（同意要求）、あるいは聞き手との共同行動の実行確認要求。「か」の母音の長短による機能の差はない。低接音調・機能2の「か」と対立する。相手への働きかけや促しが強い点で低接音調・機能2と対立する。ただし、ここでも低接音調との差はいつでも明瞭とは言えず、現実の発話では機能差が十分反映していないことがある。なお、個人による差もあるらしい（村中・郡1990参照）。

### 用例と分析：

小学校の図画の時間です。はじめはおとなしくお絵かきしていた子供たちもだんだん私語をはじめ、しまいにはとなりの教室に聞こえそーなくらいうるさくなりました。そこでふだんから恐れられている男の先生が「さあ、もーちょっと静かにしよーか（サ モ チ ヨ ツ カ）」とひとこと言うと急にみんな水をうったよーにしーんとなりました。（ここでは同意を要求する気持ちが強く、事実上の命令になっている。仮に低接の「か」を使って サ カ とすると、ひとりごと、あるいは気の弱そうな先生を感じがし、この場面にはそぐわない。サ カ だけなら単なる誘いか、穏やかな命令。）

ちょーどきりのえーとこまで授業が進みました。先生が大きな声で言います：「そしたら今日はここまでにしとこか（ソ シ ラ キ ヨ ウ ニ シ ト コ カ）。きよーやつたところ、ちゃんと復習して来るよーに。大事なとこやから覚えとかなあかんで。えーな。」（ここでは有無を言わせない宣言。低接の「か」で ソ カ とすると、ひとりごと、もしくは迷いがあるような感じがするため、この場面にそぐわない。ソ カ なら単なる宣言であり、生徒への働きかけが感じられない。）

**解説：** 基本的には、前形式で表されている自分の提案に相手が従うかどうか、あるいはその提案を相手が認めるかどうかを問う回答要求である（「か」のつかない意志形だけでは勧誘あるいは決意の表明（宣言）であり、前者の場合は聞き手は何らかの反応することが必要であるが、この「か」がつくときは意識的な回答要求になる）。しかし、それだけでなくこの「か」は同時に自らの提案に対する強い実行意志を表明し、相手がそれに従うことや相手の肯定的な態度を要求している。したがって、極端な場合は相手の意志を無視した一方的な行動宣言にすぎないことや、ときには実質的な命令になることもある。形式的には回答要求であるから、これに異議を唱えることはできるが、反対される可能性を十分考えての発言ではない。また、自分がその行動を実行するぞと脅かし挑発している場合もある。もちろん、ことばの上だけは強気でも実際にはその行動を実行しないこともありうる。また、すでに以前から相手と合意している行動に関しては、共同行為の開始の合図となる。このように、この「か」を伴う提案は相手に対する働きかけの度合いが強く、促す気持ちが強い提案だと言える。自らを強く促す際のひとりごとや内言としても使われる。

## [2] 低接音調

寝る→寝るか(-), 見る→見るか(-), おる→おるか(-), あめ; あめ→あめか(-).  
前形式のアクセントが有核型の時順接音調と区別できない。

### 機能1

前形式: [1] 動詞・形容詞以外の自立語, および名詞+格助詞。形容動詞は語幹につく。

動詞・形容詞には形式名詞「の」「ん」を介してつく。「の」「ん」は低接であるから続く「か」の音調を中和する。そのためこの場合の「か」は順接とも低接とも決めがたいが、機能の点からここに分類する。

[2] 文やその一部を引用し, それに直接, あるいは伝聞の「て」(低接)を介してつく。動詞の終止形や意志形を引用する場合, 低接音調・機能3, 同2と対立する。

### 機能:

形式的な確認要求という行為を通して, 情報や事態を認知したことを示す。このときその情報や事態, あるいは相手に対して話し手は感情的に強く関わっている。すなわち, 驚き・怒り・失望や安堵など種々の情動反応を起こしているということ, あるいはそれに関して自分が今何かを考えているということを表示している。そして, 同時に相手の反応をも求めようとしている。「か」の母音の長短による機能の差はない。確認要求の度合いがきわめて弱い点, 自己の感情移入がある点等で順接音調・機能1の「か」と異なる。

### 用例と分析:

よーけ買おて置いといたはずのビールが, 最後の一本だけしか残っていないことに気がつきました。まだまだあるつもりだったのでがっかりして: 「えー, なんや, これでしまいか(トテ コテ シカ), しょーもなー。」(もし単に シカ とするか, あるいは順接の「か」を使って シカ とすると失望感が少なく, この場面にはそぐわない。)

岡田さんが夜遅くまでひとりで残業していたら後ろから急に誰かが入ってきて「岡田くん」と大きな声で名前をよびました。びっくりして振り返ると同僚の村山さんでした。岡田さんは思わず: 「あーびっくりしたー。誰やと思たら村山さんか(アトトモカ ムヤマシカ)。」(このような強い感情表出場で ムヤマシカ あるいは ムヤマシカ はまずありえない。)

最近「BS」と言うことばをよく耳にします。こないだも人に聞かれてわからなかったので「現代用語の基礎知識」で調べてみることにしました。そしたら「放送衛星」と言う意味でした。そこで: 「へー, 『BS』て『放送用の衛星』か(ホソウヨウ エセカ)。なんでや。えーと, broadcasting ちゅーのが「放送」で, satellite が「衛星」, そやから「BS」ねー。ふーん, 知らなかったわ。」ひとつ賢くなったよーな気がしました。(もし順接音調で エセカ とすると無感動で他人事のようにであり, この場面にはそぐわない。)

「へー, 『1円を笑うもんは1円に泣く』か(イチエンヲウラエモノカ イチエンナク)」。昔の人はえーこと言うてんねんなー!」(引用形はこの音調のみ。順接の「か」を使って イチエンナク とすると無感動でなげやりな感じがし, この場面にはそぐわない。)

解説： 相手や第3者の発言の全部または一部を反復して繰り返し、もしくは相手（第3者）の行動や自分が遭遇した状況を言語化し、あるいは相手（第3者）の発言や決まり文句等を引用してそのあとにこの「か」をつける。しかし順接音調・機能1の場合と違って、予期しておらず意外な情報や新たな事態、あるいは期待はずれの事態を認知したときに発せられることが多い。

形式的には順接音調・機能1の場合と同様、相手の意図が発言の内容どおりであるかどうか、あるいは自分が相手の発言や自分が遭遇した事態を正しく把握したかどうかの確認を相手に求めている。ところが、現実にはあえて相手の確認を待つほど理解の正確さに自信がないわけではない。この点も順接音調・機能1の場合と同様であるが、この低接の「か」の場合は確認要求の度合は順接の「か」の場合よりなおいっそう弱い。むしろ、ここで話し手が聞き手に何かを期待しているとすれば、聞き手がそれについて当否以上のなんらかの応答をすることである（電車で旧友とばったり会う：「おー、いま帰るか。」「そやねん。一杯やってん。うちの会社酒のみばかりやで。」）。このように、この「か」のひとつの機能として、形式的確認要求という行為を通じて話し手が聞き手とのコミュニケーションを開始したり、前形式で示される情報や事態を新たな話題として導入する働きがある。したがって、相手にそのことに関して何か言ってほしそうな感じを起こさせる。

さらに、この「か」はその発話自体によって導入される話題（相手や第3者の発言や行動、自分が遭遇した事態を受けている）に関して、話し手自分が驚きや怒り、あるいは安堵、失望、いらだちなど種々の情動的な反応を起こしたことを表示し、同時に、そのためにその話題について今自分が何かを考えているところであるとか、あるいは自分のコメントがあるとか、これから何か行動をおこそうとしているなどということを表示する役目もする。したがって、順接の「か」を使うときは異なって、直前の相手の発言や自分が遭遇した事態への感情的関わりが強いわけである。そのため、相手に何か言ってほしそうであると同時に、それについて自分自身が何かいいたそうな感じを起こさせることも多い。しかし、自分の発言の継続を特に要求しているわけでも相手の発言をさえぎっているわけでもなく、話し相手はそれを無視して自分の発言を始めてよい。

いずれにせよこの「か」には話し手と聞き手との間のコミュニケーションを促す働きがあることになる。

また、同じ理由により、この「か」は、単に相手の話をちゃんと聞いている、または言語内容を理解したということを示すためにあいづち的に相手の発言（内容）を繰り返すときにも用いられる。さらに、相手の発言や生じた事態を認知したときのひとりごと、あるいは内言としても頻繁に用いられる。

この低接音調・機能1の「か」が順接音調・機能1の「か」と異なる点は、これが確認要求の度合（呼びかけ性）がきわめて弱いこと、そして認知した情報や事態、あるいは相手に対する話し手の感情的関わりがあるときに用いられ、前形式の内容について自らがさらに付け加えて何か言いたそうな、あるいは相手に何か言ってほしそうなニュアンスがあること、そしてなげやりなニュアンスはないことである。しかし、その差は微妙なものであり、現実の発話ではそれぞれの音調の機能が十分反映していないこともある。

## 機能2 (低接)

**前形式：** 動詞の意志形。

**機能：** 話し手の提案に対して相手がどう反応するかをうかがうための反応伺察。「か」の母音の長短による機能差なし。相手への働きかけ性が弱い点で順接音調・機能2と対立。ただし、この「か」の機能については、個人による差があるようだ(村中・郡 ibid.)。

**用例と分析：**

謝恩会は8時に始まることになっているのに、肝心の先生がなかなか現れません。食べ物はさめるしビールはなまぬるくなります。勝手に始めてしまうわけにはいかないので、幹事の学生にも思わずグチがでます：「おっそいなー、もー。はよ来てくれはったらえーのに。かなわんなー。先始めたろか、ほんまに(アハアアアア アハア)。」(ここでは本気で始めるつもりはない。もし順接の「か」を使って アハアアアア とすると、本気で始めるつもりか、そのくらい怒っている時であるが、この場面にはそぐわない。「か」のない アハアアアア は単なる宣言にすぎない。)

クラブの友達に向かって：「なあ、きょーの練習長なるんやろ？ 夜中までかかるゆー話やで。そんでもやっぱり出なあかんねんて。いややなー、さぼって先帰ったろか、ほんま(アハアア アハアアア アハア)。」(ここでは本気で帰るつもりはない。もし順接の「か」を使って アハアアアア とすると本気で帰るつもりのようにあり、この場面にはそぐわない。)

家族がみんな留守で退屈なので、ふとんにはいってテレビをみていました。ところがすぐにどのチャンネルも番組が終わってしまい、ピーという音といつしよにテストパターンが出てきました。そこで：「なんやもー終わりか。しょーもなー。」そして時計を見て：「2時か。あした早いしもー寝よか(アハ アハアア アハア)。」とつぶやいて電気を消しました。(もし順接の「か」を使って アハア とすると、ひとりごとというより誰かに声をかけているかのようであり、またひとりごととしても決意が必要以上に強すぎるように思われる。順接音調も不可能ではないがこの場面では低接の方がより適切である。)

**解説：** 順接音調・機能2の場合と同様、形式的には自分の提案に相手が従うかどうか、あるいはそれを相手が認めるかどうかを問う回答要求である。しかし、順接音調の場合とは違い同意を強く要求するものではなく、また実行意志も強くないのがふつうである。したがってその提案は口先だけで実行する気のないことも多い。むしろ、これによって相手の反応を伺う役目をする。このとき、自分にはまだ迷いがあるか、どうして良いかわからず困っているか、あるいは自分がその行動をとりたくてしかたがないのに自分の立場は相手より強くない、といった状況がある。相手が否定的意見であれば、容易に自らの行った提案を翻しうる。したがってその提案は決定を相手方に大きく委ねたものとなる。また、同じ理由により、本心ではなく、しぶしぶという気持ちの表われとなっていることもある。

また、ひとりごとや内言としてもよく使われ、自らの決意にまだ迷いがあって悩むときや本心ではない行動を自らに促す場合の他、単に自問するときや、単なる自分自身の行動宣言としても用いられることもある。

### 機能3 (低接)

**前形式：** 動詞・形容詞の終止形（助動詞含む）、名詞、形容動詞語幹。

**機能：** 何らかの条件の帰結としての推測を表わす場合に用いられる。したがって条件を表わす表現と共起するのがふつうである。「かもしれない」に近い。「か」の母音の長短による機能の差はない。

#### 用例と分析：

もー5月と言うのに、きょーは雨が降ってえらい寒い。寒がりの父親は「ストーブでもつけな、風邪ひくか(ストーブデモ ヅナ かせ ㄱㄱ)。」とひとりごとを言いながらストーブを出してつけています。（「ストーブをつけなければ」という条件下では自分が風邪をひくかもしれないと想像している。ㄱㄱ とするとなげやりな感じがし、あるいは他人事のようにであり、ここではそぐわない。また、想像しているのであるから ㄱㄱ とはならない。）

コンサートに行きたかったのに終業直前に仕事が入ってしまいました。なんとか急いでかたづけてはみたものの、もーコンサートはとっくに始まっています。そこで、「あーあ、今から行ってももー終ってるか(ㄱㄱ ㄱㄱ 데 모 ㄱㄱ)。」（やはり、条件の帰結である。もし ㄱㄱ とするとなげやりな感じがし、あるいは他人事のようにであり、残念さのあるこの場面にはそぐわない。）

**解説：** 「か」の音調を順接音調に変えると順接音調・機能1の意味になり、条件の帰結というよりも相手の発言を反復したり自分が遭遇した事態を言語化して、その発言を、感情移入なしに、しばしばあきらめを込めて受容したというサインになる。

「か」の代わりに「わ」（低接）で言い換えることができるが、「わ」は「か」に比べると断定の度合いが強い。

### [3] 疑問上昇音調

・順接し、その後「か」内部で上昇開始。「順接上昇」と言ってもよいが、文末詞の付かない疑問文尾に見られる典型的な上昇音調と音響的に同じなので疑問上昇音調と呼ぶ。

・この音調が有する機能をあらわすのに、「か」が高音を保ったまま上昇しない音調が使われることもありうるが（単なる順接音調と考える）、それは前形式のアクセントが高起式無核型の場合だけである。

・次の[4]の強調上昇との音調上の本質的な違いは、強調上昇がその拍頭からすぐに上昇を始めるのに対し、疑問上昇は順接した後「か」内部で上昇を始めるという上昇のタイミングの早い遅いの違いである。

寝る→寝るか(-), 見る→見るか(-), おる→おるか(-), あめ; あめ→あめか(-)。

前形式： 自立語および名詞＋格助詞，形容動詞語幹，形式名詞「の／ん」。動詞は終止形（助動詞含む）および意志形に，形容詞は終止形につく。

機能： 真偽の回答要求，および相手の意志の確認要求。要求の度合いが強いとき，あるいは不満感，疑惑感があるときは長呼され上昇の度合いも大きくなる。

「～してくれるか」の形では依頼の意になるが，このとき特に同意を求める気持ちが強くない限り「か」が上昇調をとる必要はなく，カ と順接するだけで十分である。

#### 用例と分析：

漫才のことを全然知らないおとーさん，テレビをみながら子どもに聞く：「なー，あれが『いくよ・くるよ』か？(アカ イクヨクルカ)」。子どもが答える：「ちやう，ちやう。『小づえ・みどり』やがな。」。おとーさん，それを聞いて「ああ，これが『小づえ・みどり』か。」と納得する。（真偽の回答要求。）

漫才のことを全然知らないおとーさん，テレビをみながら子どもに聞く：「なー，あれが『小づえ・みどり』か？(アカ コヅエミドリカ)」。子どもが答える：「ちやう，ちやう。『いくよ・くるよ』やがな。」。おとーさん，それを聞いて「ああ，これが『いくよ・くるよ』か。」と納得する。（真偽の回答要求。）

化粧を落とした八代亜紀を見て驚く：「えっ，あれほんまに八代亜紀かー？(アキ ヲシニ ヤヅキガ)」（真偽の回答要求。疑惑感大。）

家に電話して妹を呼んでもらう：「もしもし？ 俺やけど，晴美おるか？(アミ 晴カ)」

参考(依頼文) 夫が妻に：「おい，ちょっとそこの新聞とつてくれるか？(オトコ ヲイ シンブン トツテクルカ)」（依頼であるから「か」を上昇調にする必要はない。上昇調にすると同意を求める気持ちが強くなる。）

#### [4] 強調上昇音調

直前拍が高拍でも、それにさらに高くつく。直前拍が低拍なら高くつく。低起式無核の語には「か」だけが著しく高くつく。長呼されないのがふつう。

寝る→寝るか、見る→見るか、おる→おるか、あめ；あめ→あめか。

**前形式：** 自立語一般、および名詞＋格助詞、形式名詞「の」「ん」。動詞は終止形（助動詞含む）および意志形に、形容詞は終止形に、形容動詞は語幹につく。

**機能：** 反語的な回答要求。

**用例：**

いやみなことでその名を大阪中に知られるDと言う英語の教師の授業中、orangeを間違えて「桃」と訳してしまった子がいました。Dはここぞとばかり、いやみをこめて皮肉たっぷりに「オレンジて桃か？(オレンジて桃か)…。ほんまか？言うてみ？」ときよーもねちねちと生徒いじめに励むのです。

A君のおとーさんは高血圧ぎみです。ある晩このおとーさんにコーヒーの砂糖を取ってくれと頼まれたA君、ペットシュガーがなくなっているのに気がついたので、料理用の砂糖の入っている容れ物を渡しました。おとーさんはテレビを見ながら砂糖をいれてコーヒーを一口すすりましたが、とたんに吐き出しました。砂糖ではなくて塩だったのです。ちゃんと「塩」とかいてある容れ物をみながら、おとーさんはものすごい皮肉を込めてA君を責めます：「これが、この辛いのが砂糖か？(これがこの辛いのが砂糖か)よー一見てから渡さんかー、あほ。ひと殺す気か、ほんまに。」

**解説：** 相手の発言が事実でないことを話し手自身を知っているとき、あるいは相手の発言や行動が正当でないとき、もしくはそれが適当でないときに、相手の発言が事実であるか、行動が正当であるかどうかの確認を質問の形であえて相手に求めている。したがって相手を挑発するための発話であり、話し手は怒っているか、あるいは相手をバカにしているか、意地悪しているかである。込められる感情が強ければ長呼され、音調の上昇の度合も大きくなる。単なる真偽の回答の要求であれば[3]の疑問上昇の音調をとる。

## [5] 高接下降音調 (長呼される)

高接し、その後「かー」内部で下降。

寝る→寝るか<sub>二</sub>, 見る→見るか<sub>二</sub>, おる→おるか<sub>二</sub>, あめ; あぬ→あぬか<sub>二</sub>。

**前形式:** 動詞、形容詞の終止形(助動詞含む)。自立語一般にもつきうるが頻繁ではない。

**機能:** 強い否定、拒否。

**用例:**

となりの家が建て替え中で日曜日でも朝からずっとやかましい。ただでさえいらいらしているのに、母親が「はよ勉強しなさい、はよ勉強しなさい」と追い打ちをかける。もつと静かなところやなかったら落ち着いて勉強できるはずないやんけ、と腹を立てて:「こんなところで勉強なんかできるかー(コナトコデ ハンゲンナカ デキカ<sub>二</sub>)」。

亭主関白のW氏、食べ物には人一倍うるさく、味付けの気に入らないおかずがひとつでもあったら奥さんに皿を投げつけます:「こんなもん食えるかー(コナモノ ケルカ<sub>二</sub>)」。

もったいないから古いネクタイもたまにはしていけ、と奥さんに言われたW氏、明らかに流行遅れのものなので「あほか、いまだきこんなネクタイなんかしてる人おるかー(イロキ コナ ネクタイナカ シルヒト オルカ<sub>二</sub>)」とおこります。

ラジオ体操をするので6時に起きろ、とお兄さんに言われました。「6時なんか早いわ」と文句を言うと、お兄さんはおこって:「6時が早いかー(ロジツガ ハイヤカ<sub>二</sub>)。おれなんか毎日5時やぞー。」

**解説:** 前形式の言語内容に対して、「絶対違う」あるいは「絶対しない」と強く否定する。ひいては相手の要求に対する拒否にもなる。「もんか」で言い替えることができる。典型的な例として「そんなもん知るかー(シルカ<sub>二</sub>)」がある。「かいな」で置き換えることもできるが、それに比べてこの「かー」はより攻撃的である。なお、この機能で低接の「か」を使う話者がいるようである(村中・郡 *ibid.*)。

なお、後に第3節⑩⑪で見ると、命令を表わす「～せんかー」の「かー」が高接下降音調で使われるとき、順接で使われるときに比べていらだちを込めた強い意味になるが、音調の機能として共通点がある。また第3節⑤⑥の「～ねんかー」「～てんかー」「～やんかー」で高接下降の「かー」は話し手の発言への注目要求も機能を果たすが、話し手への働きかけがきわめて強い点ではやはり共通している。



## 助動詞を介さないでつく「か」の用法一覧

<p>[1] 順接：</p> <p>①（名詞（＋格助詞），動詞・形容詞終止形などについて）形式的な確認要求という行為を通して，情報や事態を受容したことを示す。このとき話し手にはその情報や事態，あるいは相手への感情的関わりが欠けている。そのため，無感動，なげやりな感じ，あるいは無関心感，あきらめた感じ感じをしばしば含む。</p> <p>②（動詞意志形について）同意要求。</p>
<p>[2] 低接：</p> <p>①（名詞（＋格助詞），動詞・形容詞＋形式名詞「の」「ん」，発話引用形などについて）形式的な確認要求という行為を通して，情報や事態を認知したことを示す。このとき話し手はその情報や事態，あるいは相手に感情的に強く関わっており，驚き・怒り・失望や安堵など種々の情動的な反応を起こしたということ，あるいはそれに関して自分が今何かを考えているということを表示する。そして，同時に相手の反応をも求めようとする。</p> <p>②（動詞意志形について）反応伺察。</p> <p>③（動詞・形容詞の終止形，名詞について）何らかの条件の帰結としての推測。</p>
<p>[3] 疑問上昇： 真偽の回答要求，および相手の意志の確認要求。</p>
<p>[4] 強調上昇： 反語的な回答要求。</p>
<p>[5] 高接下降： （主に動詞，形容詞の終止形について）強い否定，拒否。</p>

（注：助動詞「（ら）れる」「（さ）せる」「はる」「ん」を介して「か」が動詞につく場合もこの表が適用できる）

### 3. 助動詞を介してつく「か」

すでに述べたように、「(ら)れる」「(さ)せる」「はる」「ん」につく「か」については、前節で見たような音調と伝達機能の対応関係があてはまる。しかし「です」「ます」には「か」は低接しないし、「ねん」「やろ」「よる」「たい」「へん」では動詞語幹との境に音調の下がりめが生じるため、これらの助動詞を介してつく「か」は前節でみたような順接・低接による機能の差は中和される。動詞完了形の場合も動詞内部に下がりめがあるので同様の事態が生じる。また、助動詞によっては「か」と組合さって独特の表現機能を生じるものがある。ここではこうした前節の例外的事項について簡単に述べる。なお、この節では表示の便宜上、順接音調を→、低接音調を┘、高接下降音調を┘の記号で示す。

- ① →ますか →ませんか →ですか →ましたか →でしたか

「ます」(動詞の後で)「です」(名詞・名詞+格助詞・形容動詞語幹・形式名詞「の」「ん」・形容詞の後につく)はそれ自体順接音調を持つが、これらの後につく「か(一)」もかならず順接であり、そのため「ます」「です」全体で順接となる。機能的には「か」単独の場合の順接音調・機能1、低接音調・機能1の両方の機能をあわせもつ。

そーですか。帰りはりますかー。(カリハリマスカー)

誰やと思たら村山さんですか。(ムラヤマサンデスカ)

あきませんか。(アキマセカ)

- ② →ませんか

勧誘を表わす「ませんか」でも「か」は助動詞と音調的に一体化して全体で順接となり、機能的に「か」単独時の順接音調・機能2、低接音調・機能2の両方の機能をあわせもつ。なお、「ましょか」の「か」は順接、低接のいずれもと、それぞれ順接音調・機能2、低接音調・機能2と同じ機能を持つ。

ぼちぼち帰りませんか。(カリマセカ)

- ③ ┘やろか ┘でしょか

自立語、名詞+格助詞、形容動詞語幹、および形式名詞「の」「ん」(動詞、形容詞は終止形(助動詞含む))につき、回答要求機能を持つ。話し手の疑問や不確実感を解消するための質問である。ただし懐疑感があるときの自問として使われる場合もあり、相手はそれに対し答えなくても良い。逆に、反対のことを主張しようとする場合もある(反語)。

な一、これきよーもえー天気やろか。(エーテンキヤロカ)

そなん勝手に決めて、あいつうんて言うやろか。(ウツテウヤロカ)

ほんまにそやろか。(ホンマニヤロカ)

④ <sup>↑</sup>～ねんか <sup>↑</sup>～てんか

「ねんか」は動詞・形容詞の終止形（助動詞含む）、あるいは「や」を介して名詞・形容動詞語幹につく。「てんか」は動詞（+助動詞）の接続形（音便形）につく（なお⑫参照）。

聞き手が自分の話している内容に注目することを要求（＝自分の話を聞いてほしい）し、そのあとに続く発言へ導入する機能を持つ。「か」を高接下降音調にして注目要求の度合を強めることができる（⑤参照）。

すっごいこわい目で私の顔見やんねんか。(ウツシノヲ ミヤソネカ)  
そのときたまたま先生来はってんか。(トシセキハツテカ)

⑤ <sup>↑</sup>～ねんかー <sup>↑</sup>～てんかー

前形式、機能とも④と同じであるが、「か」を高接下降音調にして注目要求の度合を強める。

すっごいこわい目で私の顔見やんねんかー。(ウツシノヲ ミヤソネカー)  
そのときたまたま先生来はってんかー。(トシセキハツテカー)

⑥ <sup>↑</sup>～へんか <sup>→</sup>～んか <sup>↑</sup>～ないか

動詞・形容詞（+助動詞）の否定形には、「か」は順接する場合と低接する場合がある。ここでは順接する場合で、「か」単独時の順接音調の機能1と同じ機能を持つ。なお、低接する場合は⑦を、命令形につく「～んか」は⑩⑪を参照。

こんな安もん誰も買わんか。(カワカ) (予想どおり)

⑦ <sup>↑</sup>～へんか <sup>↑</sup>～んか <sup>↑</sup>～ないか

前形式は⑥と同様で、「か」単独時の低接音調の機能1, 2, 3と同じ機能を持つ。「～ませんか」については②参照。なお、⑩⑪の命令形につく「～んか」も参照。

よーけ注文してもどーせ食べられへんか。(トーセハラヘンカ)

⑧ <sup>↑</sup>～やんか

自立語、名詞+格助詞、形容動詞語幹（動詞、形容詞は終止形（助動詞含む））につく。

(1) 「か」単独時の低接・機能1の「か」と同様、感情的な関わりとともに、（多くの場合）新しく意外な情報や事態を認知したことを示す。ただし「か」単独時と違って確認要求の意図はほとんどない（⑨参照）。

あつ、あれさんまやんか。(アツマヤンカ)

なんや、も一始まってるやんか。(ハジマツテルヤンカ)

(2) 新しく意外な情報の認知という点で上記(1)と基本的には同じであるが、呼びかけ性が強い場合があり、このとき相手の発言や態度を否定し、それを非難し、それに対立する主張を暗におこなう。

ちゃんとそこにあるやんか。(アルヤンカ)

がんばったらできるやんか。(テギルヤンカ)

そんなことやったらあかんやんか。(アカンヤンカ)

### ⑨ ~やんかー

自立語、名詞+格助詞、形容動詞語幹、および形式名詞「の」「ん」(動詞、形容詞は終止形(助動詞含む))につく。

聞き手が話の内容に注目することを求め、同時に聞き手の同意を要求(⑧⑤参照)。

こんなんなんぼががんばったかて絶対できへんやんかー(テギルヤンカ)。それ知っててやらしよんねん。

### ⑩ ~んかー

「帰らん」「食べん」のような否定形につき、いらだちを込めた強い行動要求になる。「~ん「か」い」で言いかえることもできる。

早よせんかー。(ハヨセンカ)

### ⑪ ~んか(一)

⑩と同様であるが、⑩に比べていらだち感はなく、呼びかけている気持ちが強い。「~ん「か」い」で言いかえることもできるが、そうすると命令口調になる。

早よせんかー。(ハヨセンカ)

### ⑫ ~てんか(一)

「帰って」「食べて」のように動詞接続形(音便形)+「て」(順接)で依頼を表わすが、「て」のかわりに「てんか」になるとやや命令口調になる。

ほつといてんか。(ホツトイテンカ)

やめてんか。(ヤメテンカ)

## 4. 聞き取り調査

### 4. 1. 調査の目的と方法

第2節と3節で筆者の内省に基づいて「か」の音調と機能の対応を記述したが、次にこの筆者の音調の使い分けが大阪語一般のものといえるかどうかを問わねばならない。文末詞の用法に関する一個人の内省がどの程度他者の意識に一致しているかを検討する手段はいくつか考えられる(吉澤他1986)。ここではその一手段として、第2節で用いた27の用例を使って、問題となる「か」を含む箇所を複数の音調で筆者自身が発音した音声を大阪語話者に聞かせ、どの音調を聴取者自身が使用するかを回答させるという方法を用いた。

聴取者は大阪市内生育(少なくとも中学校まで大阪市内、その後も近郊在住)の男性6名と女性9名の計15名と、大阪市以外の大阪府生育の男性3名と女性5名の計8名、総計23名であるが、10、20代の若年層が大部分を占める(付表参照)。調査方法としては、回答用紙にランダムな順で配列した用例全文と選択肢を印刷しておき、回答者に音声を聞く前にすべての用例に目を通すよう指示した。ひとつの用例につき2あるいは3種の音調が選択肢として提示したが、そのそれぞれを順番に1度ずつ3秒程度の間隔で選択肢番号を告げる音声とともに聞かせ、これを2回繰り返したあと次の用例へと移る形をとった。重複選択は可とし、回答者が提示された音調のいずれをも使用しない場合は無回答に、用例のような表現をしない場合は×印を記すよう求めた。調査は回答者個別に実施した。

各用例に対していかなる音調を提示したか(選択肢)は、付表に結果とともに示す。付表では回答された音調を、○(順接)、●(低接)、◎(高接)、↓(高接下降)、♯(強調上昇)、↑(疑問上昇)、- (提示された音調のいずれも使用しない)、×(提示された用例のような表現をしない)の記号で表わす。

### 4. 2. 結果および考察

聴取実験に用いたテスト文は、第2節において個々の音調と機能の対応関係を文脈の中で示すために用いた用例のすべてである、用例作成にあたってはなるべく他の解釈ができにくいように配慮したつもりではあるが、第2節で見たとおり音調による「か」の機能の差というものは、情報や事態をどのようにとらえるか、どのように相手に働きかけるか、などという話し手の意図の差であるので、どれだけ細かく文脈を指定しても、第2節の用例で示した音調でしか言うことができないとは限らない場合がでてきた。同じ文脈でも他の音調で言うことができる場合については個々の用例の後の注釈で述べたとおりである。したがって、このような用例をテスト文にして聴取実験をおこなっても、複数回答が得られたり、回答者の気持ちで回答がゆれる場合がでることが想定できる。そこで、あくまで筆者の内省の範囲内であるが、もっとも適切と考えられる回答を付表の選択肢の右の列に示した。ここで2種の音調を併記したものは両者とも同等に適切、カッコ内の音調は、可能ではあるがカッコのつけていない音調に比べれば適切さは劣るという意味である。

以下、内省による音調と機能の分類ごとに考察する。なお、付表からわかるようにこの調査の回答者となった大阪市出身者とそれ以外の大阪府出身者の間には回答の差はないように思われるので両者の回答結果を併せて考察する。

番組記号

- 順探
- 低探
- 高探
- ↓ 高探下探
- ↑ 順向上探
- ♂ 強順上昇
- 週刊誌以外の番組使用

× 表欄使用せず

番組 種別	前形式	か (大阪市・府)		予判	日 時	MH 36	HK 36	MI 26	KH 24	KT 19	MO 19	IT 45	TH 41	YO 22	YU 20	YN 20	TR 20	NS 20	IE 19	NR 19	IY 20	UM 20	ON 36	IA 10	YE 22	HM 20	DA 20	IK	
		テスト文	前形式 アラビヤ																										放送 週数
順探・1	終止	乗るか、悪いな	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順探・1	終止	そんをきつこと買つか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順探・1	終止	やっぱり受物はあかんか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順探・1	名回	こんどは密探か、もういややわ	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順探・1	名回	滑か、突は滑やめてん	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・1	名回	これじゃまいか、しよーもな	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・1	名回	箱やと窓たら村山さんか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・1	名回	Bで放送用の履屋か	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・1	引用	一円を突うちんは一円に返るか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・3	終止	ストーアでもつゆ風邪ひくか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・3	終止	今から行っても一柱わてるか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順探・2	悪憑	さー、ちよっと静かにしよーか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順探・2	悪憑	きよーはこまではとこか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・2	悪憑	先始めたろか、ぼんまに	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・2	悪憑	さぼって先導したろか、ぼんま	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
低探・2	悪憑	あした早いしも一環よか	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順向上昇	名回	あれが「いくよ、くるよ」か(一)	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順向上昇	終止	そこの前取ってくれるか(一)	高起無探	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順向上昇	名回	あれが「ごま、おどり」か(一)	高起有探	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順向上昇	名回	あれぼんまに入化探記か(一)	高起有探	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
順向上昇	終止	晴美おるか(一)	高起有探	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
強順上昇	名回	オレンジで静か(一)	高起無探	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
強順上昇	名回	この幸いのが形か(一)	高起有探	↑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高探下探	終止	船通んかできるか	高起無探	↓	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高探下探	終止	こんなん食えるか	低起無探	↓	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高探下探	終止	こんなんクタイしてる人おるか	高起有探	↓	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高探下探	形回四	6時が早い	高起有探	↓	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

回答と予測との一致率(%)

80 70 75 83 85 80 68 80 65 83 95 80 63 65 90 70 63 90 75

### 順接音調・機能1（形式的確認要求：感情的な関わりなしで情報・事態を受容）

内省によれば、テスト文「帰るかー、悪いなー」、「そんなきついこと言うか」の「か」については、与えられた場面では順接が適当で低接は不適当である。回答を見ても順接を使うとした者が優勢であるから、内省と回答は概ね一致していると考えられる。一方、内省で順接のほか低接も可能と思われた「やっぱり安物はあかんか」、「こんどは故障か、もういややわ」、「酒か、実は酒やめてん」では順接の回答もあるが、むしろ低接の方が優勢である。しかしこの結果は筆者の内省に基づく予測と矛盾するものではない。

### 低接音調・機能1（形式的確認要求：感情的な関わりとともに情報・事態を受容）、および低接音調・機能3（条件帰結・推測）

内省ではいずれのテスト文の「か」も低接が適当、順接は不適当である。回答結果でも低接が圧倒的に優勢であり、内省に基づく予測とほぼ一致している。ただし「これでしまいか、しょーもなー」は順接の回答も少なくない。これについては今のところ説明できない。なお、「ストーブでもつけな風邪ひくか」についてはそのような表現をしないという回答が少なからずある。

### 順接音調・機能2（同意要求）

内省ではいずれのテスト文でも順接が適当で低接は不適当であるが、回答も順接が圧倒的優勢になっており、内省に基づく予測とほぼ一致している。ただし「きょーはここまでにしとこか」については低接との重複回答も少なくない。

### 低接音調・機能2（反応伺察）

内省では「先始めたるか、ほんまに」、「さぼって先帰ったるか、ほんま」は低接が適当で順接は不適当、「あした早いしもー寝よか」は低接のほか順接も可能であるが、回答もこの予測に対応している。回答では3文とも低接が優勢であるが、「あした早いしもー寝よか」のみは順接も多く、やはりここでも内省に基づく予測とほぼ一致している。

ただし、動詞意志形につく「か」の音調と機能の対応関係に関して、個人差が存在することを示唆する結果が、京都語話者の内省および発音・聞き取り調査結果と大阪語話者の聞き取り調査結果の比較から得られている（村中・郡 1990）。

### 疑問上昇音調（真偽の回答要求・相手の意志の確認要求）

内省では、依頼を表わし真偽の回答要求の度合の強くない「そこの新聞取ってくれるか(一)」のみは前形式が高起式無核アクセントであるので、順接してそれ以後非上昇の音調が適当であるが、他のテスト文については疑問上昇がもっとも適当である。「そこの新聞取ってくれるか(一)」に対する回答は内省と一致しており、順接のみ、あるいは疑問上昇と順接の併用が優勢である。次に、前形式が有核アクセントの「あれが小づえ・みどりか(一)」、「あれほんまに八代亜紀か(一)」、「晴美おるか(一)」については内省では疑問

上昇のみが適当であるが、回答もこれに一致している」。しかし、前形式のアクセントが高起無核で真偽の回答要求である「あれがいくよ・くるよか(一)」は内省が疑問上昇のみのところ、疑問上昇のみという回答者は約半数にとどまり、順接との併用も 1/3 近くあった。この結果は内省と相反するものではないが、真偽の回答要求の度合いが強くても前形式が高起式無核アクセントの場合は、順接音調を使う話者がいるということかもしれない。

### 強調上昇音調（反語的回答要求）

内省では、テスト文のいずれも強調上昇、疑問上昇ともに可能である。回答でも両者の割合は相半しているが、併用回答はほとんどない。この結果は筆者の内省に基づく予測と矛盾するものではないものの、積極的に支持するものでもなく、地域差あるいは個人差等の変異を考えるべきかもしれない。

### 高接下降音調（強い否定・拒否）

内省ではいずれのテスト文にも高接下降が適当であるが、低接の発音を筆者も聞かないわけではなく、地域による差、もしくは年代等による差が考えられる。回答者の中で筆者の内省にほぼ一致した回答をしているのは大阪市の Y O（22才女性）、高槻市の I A（19才男性）のみである。このふたりを含めて回答者の反応は大きく3つのパターンに分かれているように思う。ひとつはいま見た回答者 Y O、T A のように筆者の内省に準ずるものである。別のひとつは高接下降ではなく常に低接音調を用いるもの、およびそれに準ずるものである（I T（大阪市、45女）など）。さらに第3のパターンは前形式のアクセントが無核型の場合は表で「高接下降」とした音調をとるが（「勉強なんかできるか<sub>一</sub>」、「こんなもん食えるか<sub>一</sub>」）、有核型の場合は表で「低接」とした音調をとる（「こんなネクタイないかしてる人おるか<sub>一</sub>」「6時がほやいか<sub>一</sub>」）ようなパターン、およびそれに準ずるものである（T R（大阪市、20女）など）。この3番めの反応パターンの解釈として、これらの話者はこの機能に対して実は順接してその後下降する音調（順接下降）を使うのではないかと考えることができる。なぜなら、表で高接下降とした音調は前形式のアクセントが無核型なら順接して下降する音調と区別できず、表で低接とした音調も前形式のアクセントが有核型なら順接して下降する音調と区別できないであろうからである。しかし、すべての回答者がこの3つのいずれかのパターンにきれいに分類できるというわけではない。さらに、「6時が早いか(一)」の有核の形容詞「早い」には高接下降も低く続く音調も使わない回答者、さらに「早いか<sub>一</sub>」という表現そのものを使わない回答者も少なくない。このように否定・拒否の機能に関してはいくつかの音調が大阪に存在しそうである。しかしそれが性別にもとづく差であるとは思えない。地域差の可能性もあるが、調査にあたって必ずしも詳細な出身地情報を尋ねていないのでこの点については明らかではない（京都では否定・拒否の機能に対して低接音調を用いる（村中・郡 *ibid.*））。なお、M O という回答者は自分では「勉強なんかできるか<sub>一</sub>」、「こんなもん食えるか<sub>一</sub>」「6時が早いか<sub>一</sub>」には高接下降を、「こんなネクタイないかしてる人おるか<sub>一</sub>」のみ低接を使うと回答しているが、これを高接下降にすると「若者が言っているように聞こえる」というコメントを付け加えており、高接下降は新しい発音であることを示唆するものかもしれない。



## 調査結果のまとめ

以上をまとめると、まず強い否定・拒否の機能に対応する音調に何らかの要因にもとづくバリエーションがあるらしいこと、次いで真偽の回答要求の場合に前形式が高起式無核アクセントなら順接で上昇しない音調を使う話者がいるかもしれないという2点については筆者の内省を大阪語一般のものとするにはできないが、それ以外の点ではこの調査の対象となった大阪語話者の聞き取り調査の結果は筆者の内省に基づく予測と矛盾しない。この調査の性格上、内省に基づく予測と矛盾しない回答結果が得られ場合でも、それがただちに内省の正しさを証明する訳ではない。証明されるのは音調の使い分け方のパターンが筆者と同じか異なるかということである。その意味においては、筆者の「か」の音調の使い分けパターンは全体として大阪語のそれを代表していると言えると考える。

一方、個々の回答者について見ると、その回答の結果と筆者の内省に基づく予測の一致度が高い回答者と比較的低い回答者がいる。筆者の内省に基づく予測が複数の回答を許さないテスト文20文について、回答結果と予測の一致度を計算し、付表最下段に%で表示した。なお、回答者が重複回答している場合は半分一致として計算した。

23名の回答者の筆者の予測との一致度の平均は77%(sd 9.5)であるが、一致度が87%(平均値+SD)以上と高い回答者はYO(90%, 大阪市, 22女), NR(95%, 大阪市, 19女), IA(90%, 高槻市, 19男), DA(90%, 堺市, 20男)の4名で、予測との一致率が68%(平均値-SD)以下と比較的低い回答者はIT(68%, 大阪市, 45女) YN(68%, 大阪市, 20女), NS(65%, 大阪市, 20女), UM(63%, 吹田市, 20女), ON(65%, 茨木市, 36男), HM(63%, 枚方市, 23女)の6名である。予測との一致度が最高の回答者と最低の回答者の間には30%以上の一致度の差があるが、一致度の高い回答者群と低い回答者群の間に特に生育地、年齢、性別による差があるようには思えない。

## 文献

木部暢子(1989):「鹿児島二型アクセントにおける助詞・助動詞のアクセント」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』桜楓社。1-16。

郡史郎(1989):「発話の音調を規定する要因 - 日本語イントネーション論」『吉沢典男教授追悼論文集』吉沢典男教授追悼論文集編集委員会。116-127。

佐久間鼎(1963):『日本音声学』風間書房。

田中章夫(1973):「終助詞と間投助詞」『品詞別日本文法講座9 助詞』明治書院。

藤原与一(1982, 1985, 1986):『方言文末詞〈文末助詞〉の研究』(全3巻)春陽堂。

村中淑子・郡史郎(1990):「文末詞「か」の音調と機能における大阪語と京都語の差」

『方言音調の諸相-西日本(1)』(文部省重点領域研究「日本語の音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」研究成果報告書)。53-76。

吉澤典男・郡史郎他(1986):「実験的手法を用いた方言文末詞調査の一方法(音調と表現意図)」『近畿音声言語研究会第8回研究発表会原稿集』。

和田実(1969):「辞のアクセント」『国語研究』29。

Couper-Kuhlen, E. (1986) *An introduction to English prosody*, Arnold.